岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 159

平　田　遺　跡

県営北房町圃場整備
事業に伴う確認調査

2001

岡山県教育委員会

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 159

平　田　遺　跡

県営北房町圃場整備
事業に伴う確認調査

2001

岡山県教育委員会

序

この報告書は上房郡北房町上中津井に所在する平田遺跡の確認調査報告書です。

この確認調査は県営北房町圃場整備事業に先立ち、事業予定地内にある埋蔵文化財の基礎資料を得て、埋蔵文化財の保護・保存と圃場整備事業との調整を図るため、平成12年度国庫補助事業として行われたものです。

北房町は岡山県の中北部、吉備高原の一角に位置し、今回調査の対象となった中津井地区は町域の南部にあたります。中津井地区は備中川の支流中津井川により形成された狭長な平野部とその周囲を取り囲む丘陵部からなり、丘陵裾部を中心に数多くの埋蔵文化財が確認されています。特に７世紀代には定北古墳、定東塚・西塚古墳、大谷１号墳と、畿内中央政権との強い政治的結びつきを窺わせる、特異な内容を持った終末期古墳が継続して築かれており、当時の政治・社会情勢を考える上で非常に重要な位置を占めています。今回の調査地はこれらの埋蔵文化財を残した人々の生活と生産の場であり、詳細な確認調査によりその実態が解明されることが期待されました。

調査の結果、丘陵裾部を中心に弥生時代から中世の遺構・遺物を確認するとともに、中津井川の右岸では17世紀後半、備中松山藩の新田開発によるものと考えられる広範囲に広がる水田層を確認しました。また、この地域の古地形をある程度復元できる資料を得ることができました。さらに、関係機関各位の御理解と御協力により、圃場整備予定地内で確認された埋蔵文化財については盛土により保存されることになり、埋蔵文化財保護行政を進める上でも大きな成果を挙げることができました。

これらの調査成果を収載した本書が、学術研究に寄与するのみならず、地域の歴史や文化財の保護・活用の一助となれば幸いと存じます。

最後になりましたが、発掘調査および報告書作成にあたり、文化庁ならびに高梁地方振興局、北房町役場、北房町教育委員会、地元地権者の皆様から賜りました種々の御指導と御支援に対し、厚くお礼申し上げます。

平成13年３月

岡山県古代吉備文化財センター
所長　正　岡　睦　夫

例　言

1　本書は上房郡北房町圃場整備事業に伴い、岡山県教育委員会が平成12年度国庫補助を受け、岡山県古代吉備文化財センターが確認調査を実施した平田遺跡の発掘調査報告書である。

2　平田遺跡は地形によりＡ～Ｃの３地点に分けられる。このうち、平田遺跡Ａ地点は上房郡北房町上中津井867ほか、平田遺跡Ｂ地点は同町上中津井648ほか、平田遺跡Ｃ地点は同町上中津井1165ほかに所在する。なお、Ａ・Ｂ地点は事前の分布調査で、Ｃ地点は今回の確認調査で判明した遺跡である。

3　確認調査は岡山県古代吉備文化財センター職員佐藤寛介が担当し、平成12年９月25日から11月14日まで実施した。調査面積は280㎡である。

4　確認調査にあたり、文化庁文化財保護部記念物課坂井秀弥文化財調査官より有益な御指導・御助言を頂いた。記して感謝の意を表す次第である。

5　本書の作成・執筆・編集は、岡山県古代吉備文化財センターにおいて佐藤が行った。このうち、遺物写真については江尻泰幸氏の協力と援助を仰いだ。

6　本書の作成にあたり、センター職員各位のほか、次の機関・諸氏から多大な御支援と御助言を頂いた。記して深謝の意を表す次第である。

　高梁地方振興局、北房町役場、北房町教育委員会、地元地権者

7　本書に収載した遺物および図面・写真等の記録は、岡山県古代吉備文化財センター（岡山市西花尻1325－３）に保管している。

凡　例

1　本書の遺構実測図に用いた高度は海抜高である。また、方位は第１・２・31図が真北で、そのほかは磁北である。調査地周辺の磁北線偏差は西偏約７°０”を測る。

2　本書に掲載した遺構・遺物実測図の縮尺は遺構が１/80、遺物が１/４、遺物写真が１/２に統一している。

3　本書に掲載したトレンチおよび遺構実測図のうち土層断面のみ掲載したものについては、方位を次のように略して記載している。

東：E（East）　西：W（West）　南：S（South）　北：N（North）

4　土器実測図には通し番号を付している。また、その説明にあたり、壺形土器、甕形土器、高杯形土器などを壺、甕、高杯のように略して記述している。

5　土器実測図のうち中軸線の左右が白抜きのものは、小破片のため復元口径に不確実性があるものである。また、全般に小片の土器が多いため、傾きについても不確実性があることを断っておく。

6　本書における時期区分は一般的な政治史区分に準拠し、それを補うために文化史区分、西暦を併用している。

7　本書の第１図は国土地理院発行の１/25,000地形図「砦部」・「井倉」を複製し、遺跡の分布を加筆したものである。遺跡の位置と名称は『北房町史』通史編上（北房町教育委員会1992年）の遺跡分布図を基本に、近年の調査研究成果を盛り込み作成した。また、古墳の分布については岡山大学文学部考古学研究室作成の資料を参考にさせていただいた。

目　次

序
例言
凡例
目次
第１章　調査及び報告書作成の経緯と体制 …… 1
　第１節　調査にいたる経緯 …… 1
　第２節　調査・報告書作成の体制 …… 1
第２章　遺跡の位置と環境 …… 2
第３章　発掘調査の概要 …… 4
　第１節　調査区の設定と調査方法 …… 4
　第２節　調査の概要 …… 4
第４章　まとめ …… 16
写真図版
報告書抄録

挿　図　目　次

第１図　北房町の位置(１/2,000,000)と調査地周辺の主要遺跡(１/25,000) …… 3
第２図　調査地周辺の地形およびトレンチ配置図(１/6,000) …… 5
第３図　Ｔ－１断面図(１/80) …… 6
第４図　Ｔ－２断面図(１/80) …… 6
第５図　Ｔ－３断面図(１/80)・出土遺物(１/４) … 6
第６図　Ｔ－４断面図(１/80)・出土遺物(１/４) … 7
第７図　Ｔ－５断面図(１/80) …… 7
第８図　Ｔ－６断面図(１/80)・出土遺物(１/４) … 7
第９図　Ｔ－７断面図(１/80) …… 8
第10図　Ｔ－８断面図(１/80) …… 8
第11図　Ｔ－９断面図(１/80) …… 8
第12図　Ｔ－10平・断面図(１/80) …… 9
第13図　Ｔ－11平・断面図(１/80) …… 9
第14図　Ｔ－12断面図(１/80)・出土遺物(１/４) … 9
第15図　Ｔ－13断面図(１/80)・出土遺物(１/４) … 10
第16図　Ｔ－14断面図(１/80)・出土遺物(１/４) … 10
第17図　Ｔ－15断面図(１/80)・出土遺物(１/４) … 11
第18図　Ｔ－16平・断面図(１/80)・出土遺物(１/４) … 11
第19図　Ｔ－17平・断面図(１/80) …… 12
第20図　Ｔ－18平・断面図(１/80) …… 12
第21図　Ｔ－19断面図(１/80) …… 12
第22図　Ｔ－20平・断面図(１/80) …… 13
第23図　Ｔ－21断面図(１/80) …… 13
第24図　Ｔ－22断面図(１/80)・出土遺物(１/４) … 14
第25図　Ｔ－23断面図(１/80) …… 14
第26図　Ｔ－24断面図(１/80) …… 14
第27図　Ｔ－25断面図(１/80) …… 14
第28図　Ｔ－26平・断面図(１/80) …… 15
第29図　Ｔ－27平・断面図(１/80) …… 15
第30図　Ｔ－28平・断面図(１/80) …… 15
第31図　調査地周辺の遺跡分布図(１/8,000) …… 17
第32図　調査地周辺の土層柱状図 …… 17

表 目 次

第１表　確認調査成果一覧表……18

図 版 目 次

図版１

１．調査地遠景①Ｔ－１～12周辺（北から）

２．調査地遠景②Ｔ－22～28周辺（東から）

３．発掘作業風景Ｔ－１・２周辺（東から）

図版２

１．Ｔ－４全景（南から）

２．Ｔ－６土層断面（南から）

３．Ｔ－８（東から）

４．Ｔ－10（西から）

５．Ｔ－11（西から）

６．Ｔ－15（南から）

７．Ｔ－17（西から）

８．Ｔ－18（東から）

図版３

１．Ｔ－16（南西から）

２．Ｔ－23（南東から）

３．Ｔ－24（南東から）

４．Ｔ－26（東から）

５．Ｔ－27（東から）

６．Ｔ－28（南西から）

７．トレンチ埋め戻し作業（Ｔ－３）

８．埋め戻し終了後の状況（Ｔ－19）

図版４

出土遺物（１/２）

第１章　調査及び報告書作成の経緯と体制

第１節　調査にいたる経緯

平成10年、高梁地方振興局により上房郡北房町中津井地区41haを対象に県営圃場整備事業（県営担い手育成基盤整備事業）が計画された。

今回、圃場整備の対象となった中津井地区には、大谷１号墳、定東塚・西塚古墳といった重要な遺跡に加え、丘陵裾部を中心に名乞遺跡、渡り遺跡など周知の遺物散布地が点在しており、さらに、事業計画を受けて、岡山県教育庁文化課職員により行われた遺跡分布調査でも、丘陵裾部を中心に遺物の散布が認められた。

これを受け、圃場整備予定地内に想定される埋蔵文化財の取扱いについて、岡山県教育委員会・高梁地方振興局・北房町役場・北房町教育委員会による協議が行われた結果、工事着手前に確認調査を実施し、その成果により埋蔵文化財の保存に支障のない圃場整備計画を策定することを申し合わせた。

この協議に基づき、岡山県教育委員会は圃場整備予定地内における埋蔵文化財の状況を把握し、保存のための基礎資料を得るため、平成12年度国庫補助を受けて確認調査を実施することとなった。

第２節　調査・報告書作成の体制

確認調査は岡山県古代吉備文化財センターが平成12年９月25日から11月14日まで実施した。また、報告書作成は11月15日より岡山県古代吉備文化財センターにおいて調査担当者があたった。

調査・報告書作成体制

岡山県教育委員会

教 育 長	黒瀬　定生

岡山県教育庁

教育次長	宮野　正司

文化課

課　　長	松井　英治
課長代理（係長事務取扱）	松本　和男
文化財保護主査	福本　　明
主　　任	奥山　修司

岡山県古代吉備文化財センター

所　　長	正岡　睦夫
次　　長	能登原　巧
〈総務課〉	
総務課長	小倉　　昇
課長補佐（総務係長）	安西　正則
主　　査	山本　恭輔
〈調査第一課〉	
調査第一課長	高畑　知功
課長補佐（第一係長）	中野　雅美
文化財保護主事	佐藤　寛介（調査・報告書担当）

第２章　遺跡の位置と環境

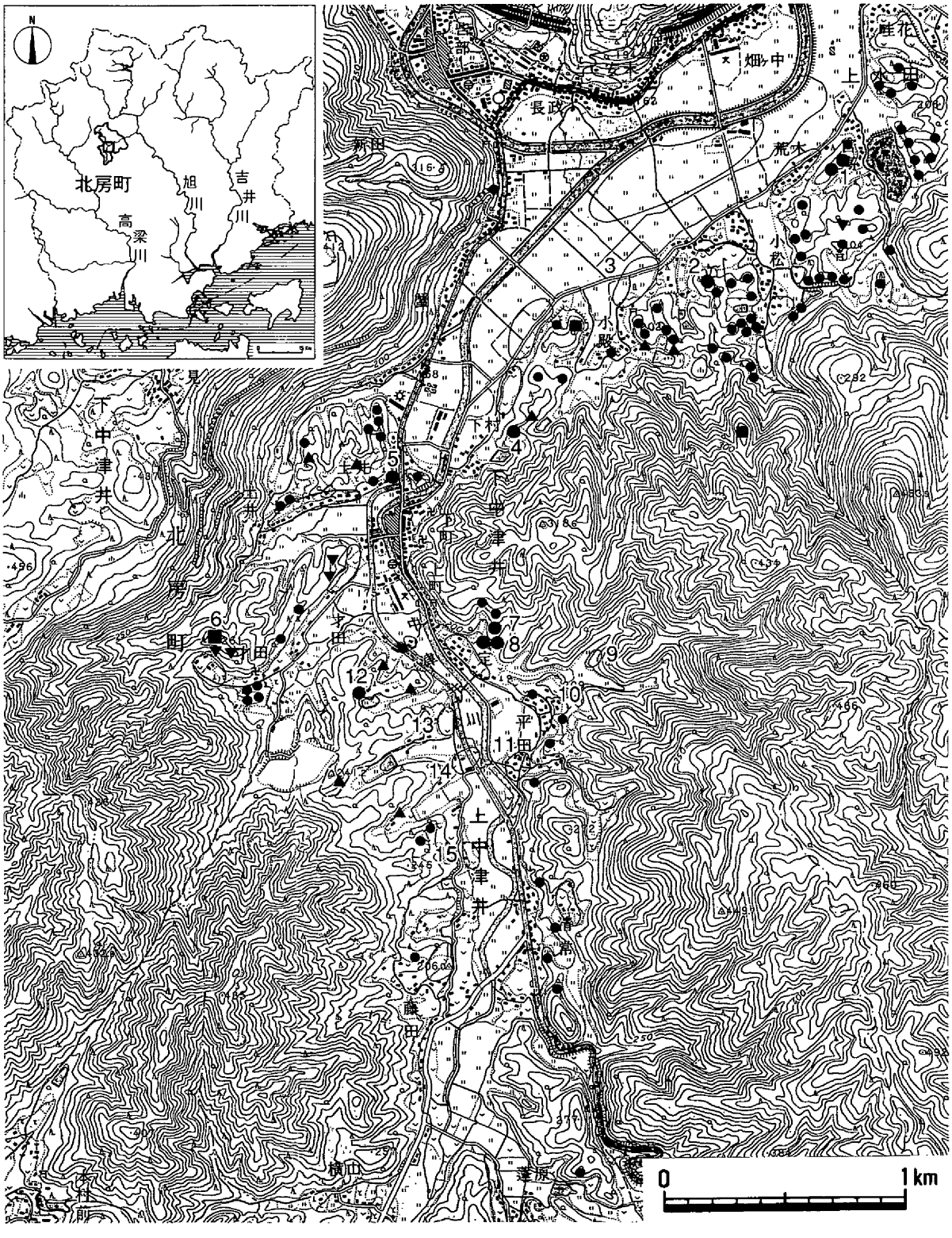
平田遺跡は岡山県の中北部、上房郡北房町上中津井大字平田に所在する。北房町は中国山地や吉備高原に連なる丘陵部と、それらに囲まれた平野部から構成されており、町内を流れる中小河川流域を中心に大きく北部の砦部地区、中央部の上水田地区、南部の中津井地区に分かれている。中津井地区は備中川の支流、中津井川の流域一帯にあたり、中津井川沿いに形成された狭長な平野部と、これを東西から挟み込むように樹枝状に張り出した丘陵部からなっている。また、高梁市北部と北房町中心部を結ぶ、備中南北間の交通の要衝でもある。(1)

さて、中津井地区における遺跡の分布を示したのが第１図である。(2) このうち、集落跡と考えられる遺物散布地は丘陵裾部を中心に10数か所で確認されている。時代的には定北古墳の調査(3)で出土した縄文時代早期の押型文土器が最も古い遺物であるが、数点の遊離資料であり、縄文時代以前の状況についてはほとんど分かっていない。散布地で採取できる遺物の状況から、集落が増えてくるのは弥生時代以降である。発掘調査例がほとんど無いことから具体的な様相は不明であるが、丘陵裾部を中心に集落が営まれているようである。特に、今回の調査地に近い矢の内遺跡では、谷川の源泉で大量の丹塗り精製土器が出土しており、水辺の祭祀遺跡として注目される。(4) 古墳時代についても集落の様相は不明であるが、丘陵尾根筋や裾部を中心に30数基の古墳が確認されている。このうち、確実に古墳時代前中期のものは認められず、その多くは古墳時代後期から終末期にかけて築造されたものと考えられる。特に、７世紀代には定北古墳、定東塚・西塚古墳(5)、大谷１号墳(6)と、畿内中央政権との強い政治的結びつきを示唆する卓越した規模と内容をもつ古墳が継続して築かれている。また、山陰地方からの影響と交流を示す墓制として横穴墓があり、現在10基ほどが確認されている。(7) 古代には英賀郡中井郷が成立する。その実態は不明な点が多いが、治暦四年（1068年）後三條天皇の大嘗祭で供御料を奉納した主基田が今回の調査地一帯に比定されており注目される。(8) 中世の状況も考古資料からははっきりしない点が多いが、備中北部有数の山城である佐井田城が築かれていることから、引き続きこの地域が社会的、政治的に重要な位置を占めていたことが窺える。

以上、平田遺跡の所在する中津井地区の地理的歴史的環境について概略を記した。今回調査の対象となった中津井地区の平野部は、これらの遺跡を支えた生産基盤として評価できるが、その内容には不明な点が多く、今回の確認調査により初めて考古学的な調査のメスが入れられることになった。

註

（１）『岡山県の地名』日本歴史地名大系34　平凡社　1988年
（２）凡例７参照
（３）新納　泉・尾上元規『定北古墳』　北房町教育委員会　1995年
（４）平井　勝「原始古代の社会と文化」『北房町史』通史編上　北房町教育委員会　1992年
（５）岡山大学文学部考古学研究室『定東塚・西塚古墳』第２次調査概要報告　1995年
（６）近藤義郎・河本　清「大谷１号墳」『北房町埋蔵文化財発掘調査報告』７　北房町教育委員会　1998年
（７）大谷晃二「山陽地域の横穴墓の諸問題」『古代吉備』第14集　古代吉備研究会　1992年
（８）毛利　博「大嘗祭と主基田」『北房町史』通史編上　北房町教育委員会　1992年



一遺物散布地（集落跡）　●一古墳　▲一横穴墓　▼一経塚または古墓　■一山城

1．荒木山東塚・西塚古墳　2．立１号墳　3．小殿遺跡　4．下村古墳　5．土井２号墳
6．佐井田城跡　7．定北古墳　8．定東塚・西塚古墳　9．矢の内遺跡　10．平田遺跡Ａ地点
11．平田遺跡Ｂ地点　12．大谷１号墳　13．渡り遺跡　14．名乞遺跡　15．平田遺跡Ｃ地点

第１図　北房町の位置（１/2,000,000）と調査地周辺の主要遺跡（１/25,000）

第３章　発掘調査の概要

第１節　調査区の設定と調査方法

今回、確認調査の対象となった北房町上中津井の圃場整備予定地は、地形的には中津井川の両岸に形成された狭長な平地部と、それを挟み込むように東西から張り出した丘陵の裾部からなる。現在、平地の大部分は水田もしくは特産の黒大豆畑として利用され、丘陵裾部は畑地あるいは宅地として利用されている。また、樹枝状に展開する丘陵の谷間は谷水田として利用され、谷筋奥には溜め池が多く築かれている。集落は丘陵裾部の緩斜面を中心に数戸がまとまって点在している。

圃場整備予定地は第２図のアミ掛け部分である。このうち、旧流路あるいは氾濫原と考えられる中津井川沿いの土地と、丘陵谷間の土地については、遺跡の所在する可能性が極めて低いことから調査対象から外した。確認調査は、圃場整備予定地のうち事前の遺跡分布調査で遺物の散布が認められた範囲と、地形的に遺跡の所在が想定される範囲を中心に、計28本のトレンチを設定して行った。各トレンチの規模は２×５ｍで、総調査面積は280㎡である。このうち、中津井川右岸に広がる平地部にＡブロックとして12本のトレンチを設定した。また、中津井川左岸の丘陵裾部を中心にＢブロックとして９本、Ｃブロックとして７本のトレンチを設定した。

調査は掘り下げ・埋め戻しとも人力で行った。遺構が確認されたトレンチでは、全体を遺構面まで掘り下げ、遺構の性格・時期を確認した。遺構が認められないトレンチでは、できるだけ深掘りして土層堆積状況の把握に努めた。また、作業員の安全確保のため、トレンチの掘り下げは階段状に行い、深さは地表下２ｍ前後までとした。さらに木材により掘削面の補強を適宜行い、トレンチの崩壊などが生じないよう配慮した。掘り下げの際に生じる排土は、耕作土とそれより下層の土が混じらないよう分別した。調査終了後は排土を数段階ずつ分けて埋め戻し、石灰を散布するとともにプレートで叩き締めて旧状に復した。

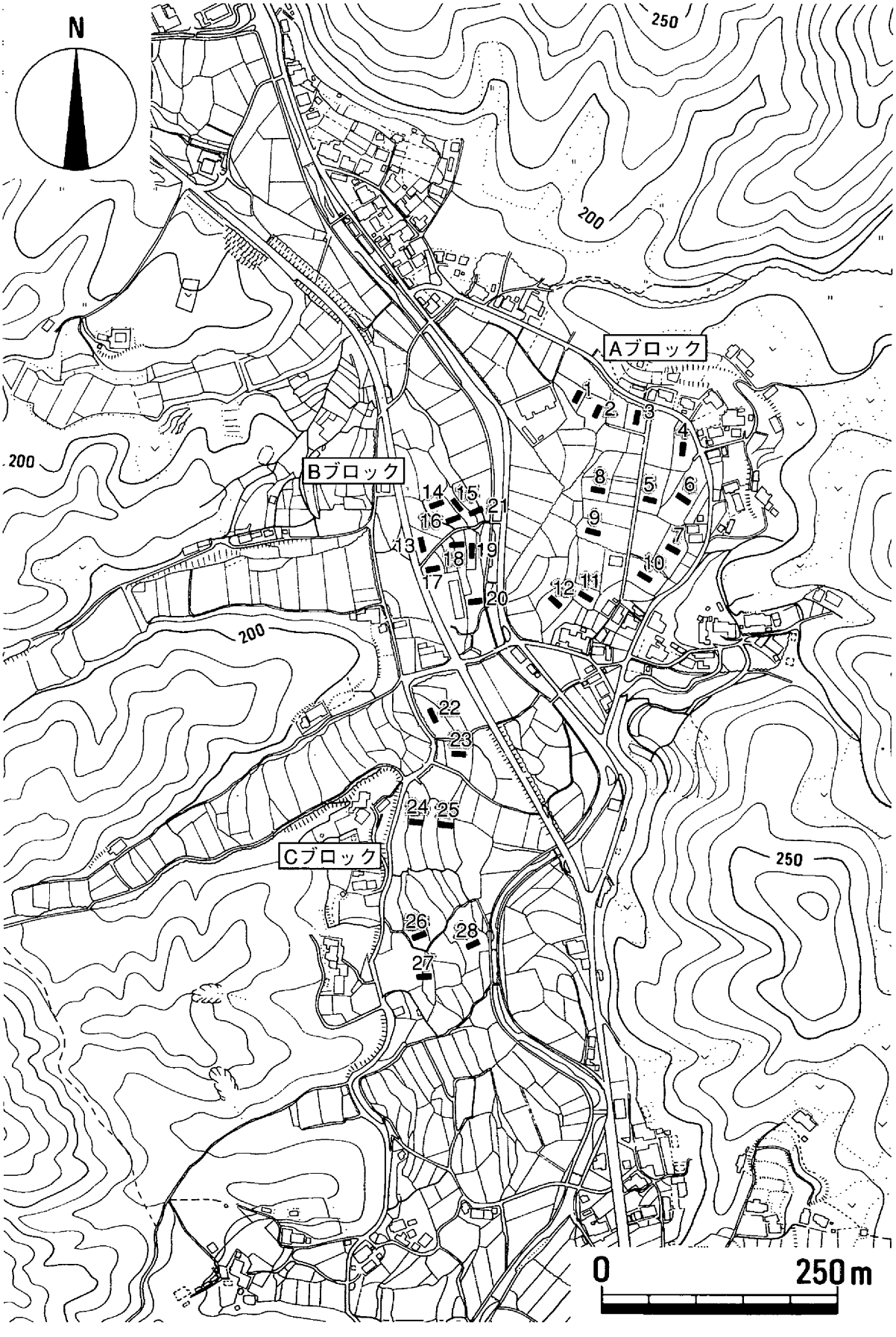
第２節　調査の概要

Ａブロック（Ｔ－１～12）

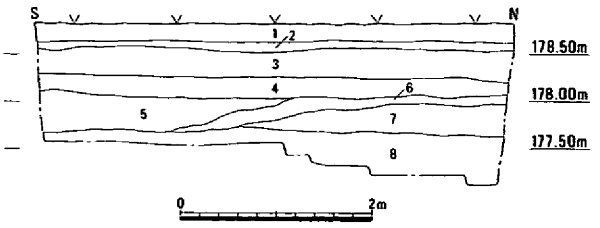
Ａブロックは中津井川右岸に形成された小規模な平地に位置する。北と東を丘陵に、西を中津井川に囲まれた南北約250ｍ、東西約200ｍの範囲であり、現在はその大部分が耕地として利用されている。このうち、西半側は東半側に比べ一段低くなっており、中津井川の旧流路と考えられることから、東半側の丘陵裾部に近い範囲を中心に12本のトレンチを設定し、調査を行った。

Ｔ－１（第３図）

主軸を南北方向に設定し、西壁を観察した。遺構は確認されなかったため、土層のみ掲載している。土層のうち、１・２層は現代水田耕土・床土である。３・４層は均一な水平堆積状況や土質から水田層と考えられる。遺物を含まないため詳細な時期は分からないが、下層の状況から近世のものと考え

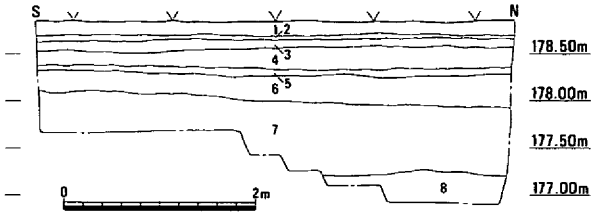


第２図　調査地周辺の地形およびトレンチ配置図（１/6,000）　※アミ掛けは圃場整備予定地を示す



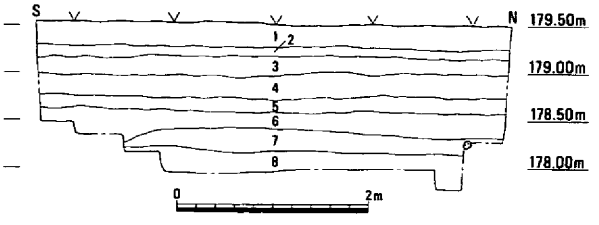
1．暗褐色粘質土　　5．黒褐灰色粘土
2．暗赤褐色粘質土　　6．黒褐灰色粘質微砂土
3．暗褐灰色粘土　　7．黒褐灰色砂質土
4．暗灰褐色粘土　　8．黒灰色粘土

第３図　Ｔ－１断面図（１/80）

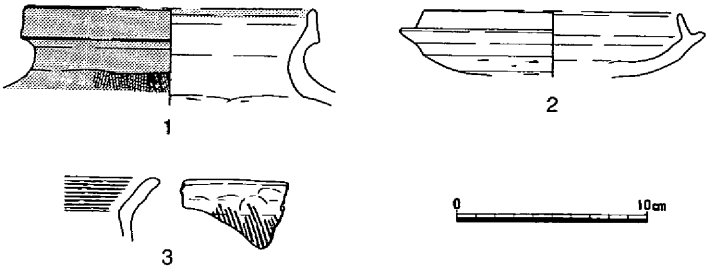


1．暗褐色粘質土　　5．暗灰褐色粘質土
2．暗赤褐色粘質土　　6．黒褐色粘土
3．暗青灰色粘質土　　7．黒灰褐色粘土
4．暗褐灰色粘土　　8．黒灰色粘質微砂土

第４図　Ｔ－２断面図（１/80）



1．暗褐色粘質土　　5．暗灰褐色粘土
2．暗赤褐色粘質土　　6．灰褐色粘土
3．暗褐色粘質土　　7．黒灰色砂質土
4．黒褐色粘質土　　8．黒灰色粘土



第５図　Ｔ－３断面図（１/80）・出土遺物（１/４）

られる。５・６層は粘性の強い堆積土で、弥生時代～中世の遺物を若干含んでいる。遺物は出土状況から上方から流れ込んできたものと考えられ、北および東方の丘陵裾部に、当該期の集落域があったことが想定される。７層は砂質土で、中津井川の洪水砂である可能性が考えられる。８層は黒色を呈し、水分を多く含む粘性の強い土層である。弥生～古墳時代の遺物を若干含むことから、当該期の旧表土と考えられる。この８層の下層には丘陵から続く基盤層が存在するが、作業の安全を考慮してこれ以上の掘り下げは行わなかった。遺物は６層から弥生土器の細片が数点出土している。

Ｔ－２（第４図）

主軸を南北方向に設定し、西壁を観察した。遺構は確認されなかったため、土層のみ掲載している。土層のうち、１・２層は現代水田土、３～５層は近世水田土、６・７層は古代～中世の堆積土、８層は弥生～古墳時代の旧表土である。遺物は６層から弥生土器の細片が数点出土している。

Ｔ－３（第５図）

主軸を南北方向に設定し、西壁を観察した。遺構は確認されなかったため、土層のみ掲載している。土層のうち、１・２層は現代水田土、３・４層は近世水田土、５・６層は古代～中世の堆積土、７層は洪水砂、８層は弥生～古墳時代の旧表土である。遺物は４層から１・２・３が出土している。このうち、１は弥生土器の甕である。外面と口唇部内面にかけてベンガラによる赤彩が施されている。口縁部はヨコナデ、頸部以下は外面ハケメ、内面ケズリである。時期は口縁部の形態から弥生時代後期後半である。２は須恵器杯身で推定口径13.3cmを測る。時期は受部の形態から６世紀後半である。３は土師器の甕で内外面ともハケメ調整を施している。

Ｔ－４（第６図・図版２－１）

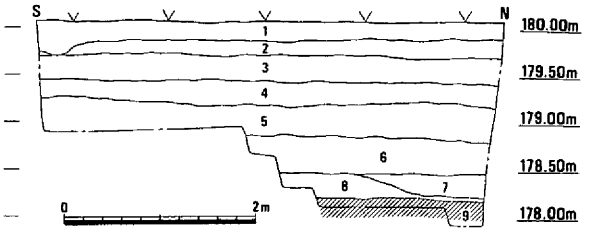
主軸を南北方向に設定し、西壁を観察した。遺構は確認されなかったため、土層のみ掲載している。土層のうち、１・２層は現代水田土、３・４層は近世水田土、５・６層は古代～中世の堆積土、７層は洪水砂、８層は弥生～古墳時代の旧表土である。９層は北の丘陵裾部から続く粘質土で、遺物を含まない基盤層である。遺物は４層から４が出土している。４は弥生土器の甕である。口縁部から頸部にかけてヨコナデで仕上げ、内面は頸部直下までケズリを施している。時期は口縁部の形態から弥生時代後期後半と考えられる。

Ｔ－５（第７図）

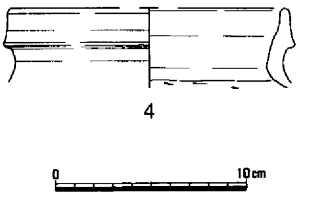
主軸を東西方向に設定し、北壁を観察した。遺構は確認されなかったため、土層のみ掲載している。土層のうち、１・２層は現代水田土、３～６層は近世水田土、５・６層は古代～中世の堆積土、７層は洪水砂、８層は弥生～古墳時代の旧表土である。９層は基盤層である。遺物は出土していない。

Ｔ－６（第８図・図版２－２）

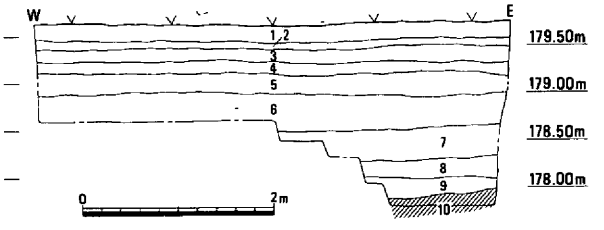
主軸を東西方向に設定し、北壁を観察した。遺構は確認されなかったため、土層のみ掲載している。土層のうち、１・２層は現代水田土、３・４層は近世水田土、５層は古代～中世の堆積土、６・７層は弥生～古墳時代の旧表土、８層は基盤層である。５層上面で樹枝数点が出土したが、いずれも未加工のものであった。遺物は５層から６、６層から５が出土している。５は弥生土器の小片で、器壁の厚さから壺の頸部と考えられる。摩耗が激しく、調整ははっきりしないが、外面に４条の凹線文が確認できる。色調は淡灰褐色を呈す。これらの特徴から弥生時代中期後半のものと考えられる。６は備前焼擂鉢の口縁部である。よく使い込まれており、内面はかなり摩耗している。口縁部の形態から15世紀前半のものと考えられる。



1．暗褐色粘質土
2．暗赤褐色粘質土
3．灰褐色粘土
4．暗灰褐色粘土
5．黒灰色粘質土
6．黒褐灰色粘土
7．黒灰色砂質土
8．黒灰色粘土
9．青灰色粘土

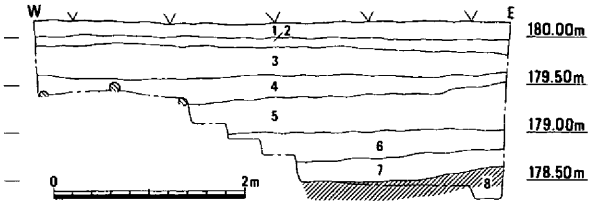


第６図　Ｔ－４断面図（１/80）・出土遺物（１/４）

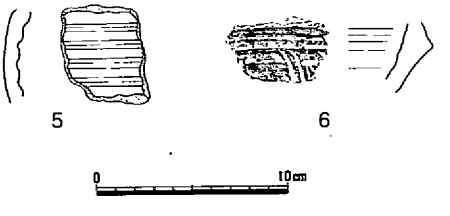


1．暗褐色粘質土
2．暗赤褐色粘質土
3．淡灰褐色粘土
4．暗灰褐色粘土
5．暗褐灰色粘土
6．灰褐色粘土
7．黒灰色粘土
8．暗黄褐色粘土
9．黒灰色粘土
10．青灰色粘質微砂土

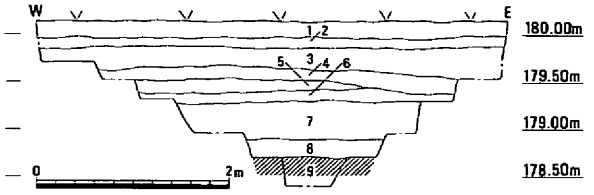
第７図　Ｔ－５断面図（１/80）



1．暗褐色粘質土
2．暗赤褐色粘質土
3．淡灰褐色粘土
4．暗灰褐色粘土
5．黒褐灰色粘質土
6．黒灰色粘土
7．６層に８層が斑文状に混じった土
8．黄褐色粘土

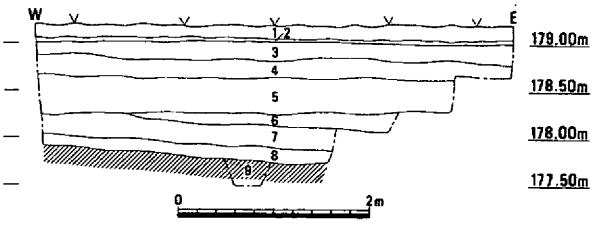


第８図　Ｔ－６断面図（１/80）・出土遺物（１/４）



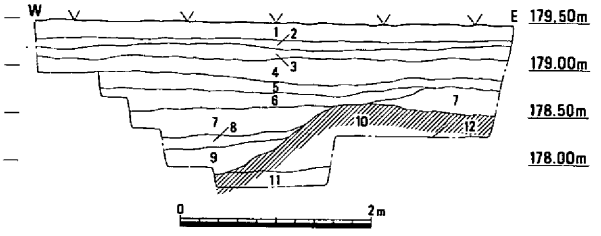
1．暗褐色粘質土　　6．黒褐色粘質土
2．暗赤褐色粘質土　　7．暗青灰色粘質土
3．灰褐色粘土　　8．黒灰色粘質土
4．黒褐灰色粘質土　　9．青灰色粘質微砂土
5．暗褐灰色粘質土

第９図　Ｔ－７断面図（１/80）



1．暗灰褐色粘質土　　6．黒褐色粘土
2．暗赤灰褐色粘質土　　7．６層に５層が斑文状に混じった土
3．淡灰褐色粘土
4．灰褐色粘土　　8．黒灰色粘質土
5．暗褐色粘質土　　9．暗青灰色砂

第10図　Ｔ－８断面図（１/80）



1．暗褐色粘質土　　7．灰褐色砂質土
2．暗赤褐色粘質土　　8．褐灰色砂質土
3．灰褐色粘質土　　9．灰色砂
4．黒灰褐色粘質微砂土　　10．灰褐色砂
5．暗灰褐色粘質微砂土　　11．黄褐色粘質土
6．暗褐色粘質微砂土　　12．暗青灰色砂

第11図　Ｔ－９断面図（１/80）

Ｔ－７（第９図）

主軸を東西方向に設定し、北壁を観察した。遺構は確認されなかったため、土層のみ掲載している。土層のうち、１・２層は現代水田土、３～５層は近世水田土、６・７層は古代～中世の堆積土、８層は弥生～古墳時代の旧表土、９層は基盤層である。遺物は出土していない。

Ｔ－８（第10図・図版２－３）

主軸を東西方向に設定し、北壁を観察した。遺構は確認されなかったため、土層のみ掲載している。土層のうち、１・２層は現代水田土、３・４層は近世水田土、５～７層は古代～中世の堆積土、８層は旧表土である。９層は粗砂を主体をする砂層である。層の厚さは確認できなかったが、よく締まっており、西から東に向かって緩やかに下がっている。遺物は出土していない。

Ｔ－９（第11図）

主軸を東西方向に設定し、北壁を観察した。遺構は確認されなかったため、土層のみ掲載している。土層のうち、１・２層は現代水田土、３層は近世水田土、４～６層は旧表土あるいは中近世の旧耕土と考えられる。７～９層は細砂を主体とする砂層で、洪水砂と考えられる。10・11層はＴ－８の９層に対応する粗砂層で、よく締まっている。12層はＴ－５～７で確認されている基盤層である。西側から大きく抉ぐり取られ、急激に落ち込んでおり、そこに10・11層が堆積し、さらに７～９層の洪水砂が堆積した状況が断面から観察できる。遺物は出土していない。

Ｔ－１～９の調査結果から推定される、この一帯の古地形についてまとめる。丘陵沿いに設定したＴ－１～７の基本層位は上から現代水田土・近世水田土・古代～中世の堆積土・弥生～古墳時代の旧表土・基盤層という堆積状況である。近世水田土以下の層は水分を多く含む粘性の強い土壌で、近世に水田として開発されるまで、この一帯は中津井川の後背湿地であったと考えられる。また、中津井川に近いＴ－８・９では弥生～古墳時代旧表土の下層に砂礫層が堆積していることから、中津井川の旧流路に沿って自然堤防が形成されているものと考えられる。これらのトレンチから出土した遺物はいずれも小片で、すぐ東の丘陵裾部に位置する平田遺跡Ａ地点から流れ込んだものと考えられる。

Ｔ－10（第12図・図版２－４）

主軸を東西方向に設定し、北壁を観察した。土層のうち、１・２層は現代水田土、３層は近世水田土、４・５層は中近世の耕作土、６層はよく締まった砂礫層である。この６層上面で柱穴２基を検出した。柱穴は近接しているが、西側の柱穴は削平により底面が痕跡的に残っているにすぎない。東側の柱穴は検出面で直径20cm・深さ30cmを測る。これらの柱穴からは遺物が出土していないため、時期の詳細は不明であるが、上層の５層から備前焼片が出土していることから、中世以前の遺構と考えられる。

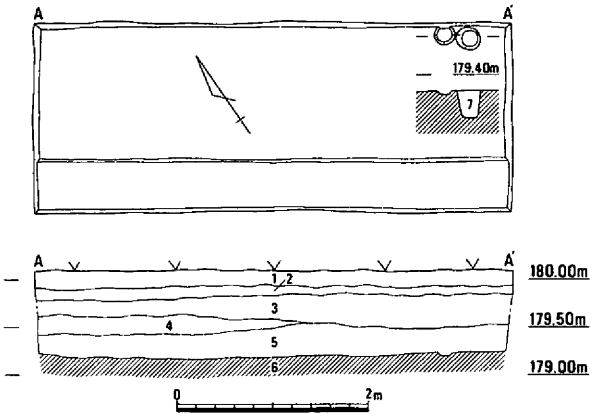
Ｔ－11（第13図・図版２－５）

主軸を東西方向に設定し、北壁を実測した。土層のうち、１・２層は現代水田土、３・４層は近現代の造成土、５～７層は近世水田土、８層は溝の埋土、９層はよく締まった砂礫層である。遺構は９層上面でトレンチ中央を南北に走る溝を１条検出した。この溝は５～７層の縁辺に沿うように掘削されていることから、近世水田と有機的な関連をもつ水路である可能性が高く、洪水砂と考えられる８層により埋没している。遺物は出土していない。

Ｔ－12（第14図）

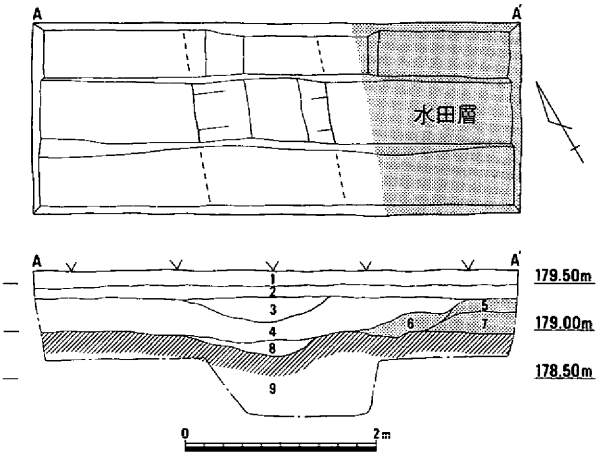
主軸を東西方向に設定し、北壁を実測した。遺構は確認されなかったため、土層のみ掲載している。土層のうち、１・２層は現代水田土、３・４層は中近世の旧耕土、５・６層は良く締まった砂礫層である。遺物は４層から７が出土している。７は亀山焼の甕の口縁部で、口縁部内外面はヨコナデで仕上げられ、頸部以下は外面に1.2mm角の格子叩き痕、内面に指頭圧痕が認められる。焼成は堅緻で、色調は暗灰色を呈する。これらの特徴や口縁部の形態から13世紀前半のものと考えられる。

Ｔ－10～12の東方一帯は、東の丘陵部から中津井川に流れる谷川が運ぶ土砂により小規模な扇状地が形成されている。このため、周囲の水



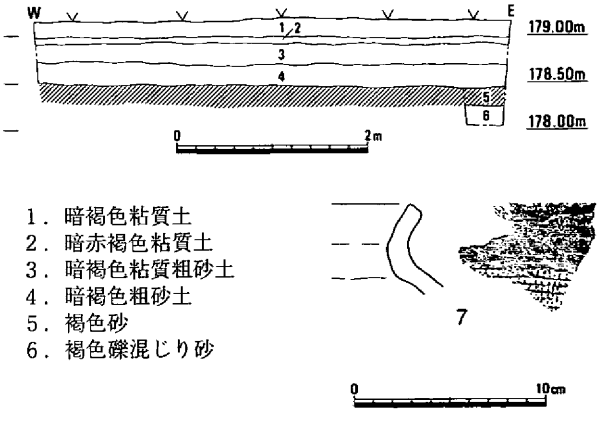
1．暗褐色粘質土
2．暗黄褐色粘質土
3．褐色粘質土に暗褐色粘質土が斑文状に混じった土
4．３層に１～３mm大の砂礫が多く混じった土
5．暗灰色粘質微砂土
6．暗灰色砂質土
7．黒褐色粘質土

第12図　Ｔ－10平・断面図（１/80）



1．暗褐色粘質土
2．暗赤褐色粘質土
3．黒褐色砂
4．黒褐色砂礫混じり粘質土
5．褐灰色粘質土
6．暗褐灰色粘土
7．褐灰色粘質微砂土
8．褐灰色砂
9．暗褐色砂質土

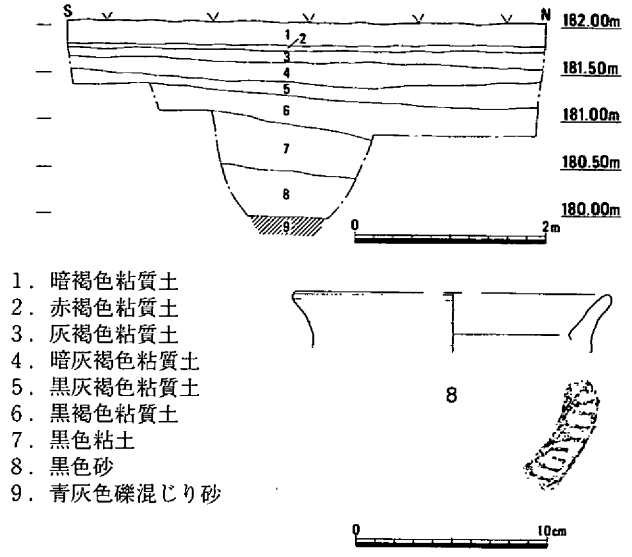
第13図　Ｔ－11平・断面図（１/80）



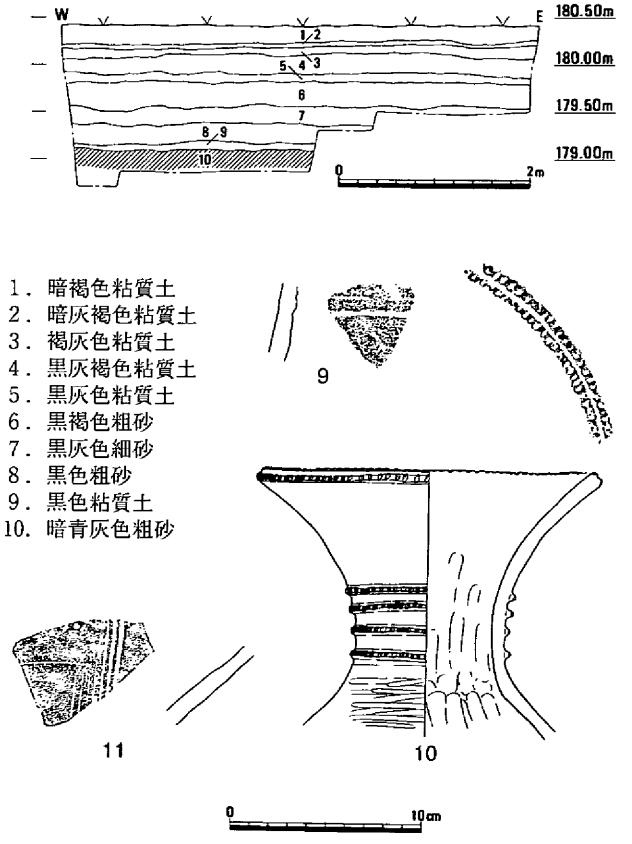
1．暗褐色粘質土
2．暗赤褐色粘質土
3．暗褐色粘質粗砂土
4．暗褐色粗砂土
5．褐色砂
6．褐色礫混じり砂

第14図　Ｔ－12断面図（１/80）・出土遺物（１/４）

田より地形が一段高くなっており、現在も集落や畑が営まれている。この小扇状地上を中心に古墳時代～中世の遺物が散布しており、粉米石（粉状石灰岩）製五輪塔も点在することから、当該期の集落跡が存在する可能性が高い（平田遺跡Ｂ地点）。この小扇状地の縁辺に設定したＴ－10～12周辺は遺構・遺物とも非常に希薄であり、平田遺跡Ｂ地点の縁辺部にあたるものと考えられる。



第15図　Ｔ－13断面図（１/80）・出土遺物（１/４）



第16図　Ｔ－14断面図（１/80）・出土遺物（１/４）

Ｂブロック（Ｔ－13～21）

Ｂブロックは中津井川左岸の丘陵裾部に位置する。この一帯は丘陵が中津井川に張り出すように樹枝状に展開しており、丘陵と丘陵の間は浅い谷地形となっている。しかし、現在では道路や宅地、水田などの造成に伴い地形が大きく改変されており、旧地形が把握しにくくなっている。また、Ｂブロック西方の丘陵裾部には周知の名乞遺跡が所在するが、その広がりや時期も不明な点が多い。このため、名乞遺跡の広がりと旧地形の把握を目的として９本のトレンチを設定した。

Ｔ－13（第15図）

主軸を南北方向に設定し、西壁を実測した。遺構は確認されなかったため、土層のみ掲載している。土層のうち、１～３層は現代水田土、４・５層は中近世の旧耕土である。６・７層は水分を多く含んだ粘性の強い土で、周囲の丘陵に堆積した黒ボクが流されて堆積したものと考えられる。８層は砂層で、洪水によって一気に埋まった状況が窺える。９層は砂礫層でよく締まっている。こうした埋土の状況から、Ｔ－13は西の谷地形の延長上にあたり、弥生時代頃に洪水で埋没し、中世以降になってから耕地として利用されるようになったものと考えられる。遺物は５層から８が出土している。８は弥生土器の壺で、二重口縁の上段部である。内外面ともヨコナデで仕上げられ、下段との接合面には接合を強化するための刻み目が施されている。口縁部の特徴から弥生時代後期後半のものと考えられる。

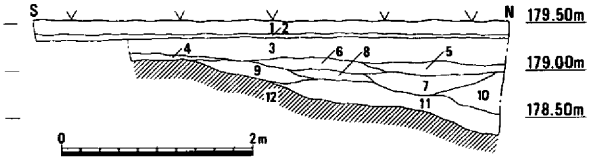
Ｔ－14（第16図）

主軸を東西方向に設定し、北壁を実測した。遺構は確認されなかったため、土層のみ掲載し

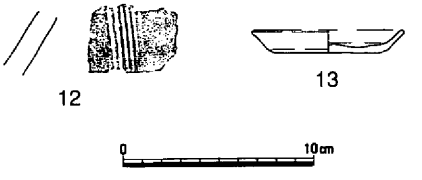
ている。土層のうち、１～３層は現代水田土、４・５層は近現代の旧耕土である。６～８層は砂層で、洪水によって一気に埋まった状況を呈している。９層は水分を多く含んだ粘性の強い土で、周囲の丘陵に堆積した黒ボクが流されて堆積したものと考えられる。10層は砂礫層で、よく締まっている。こうした埋土の状況から、Ｔ－14はＴ－13同様、西の谷地形の延長上にあたるものと判断した。遺物は４層から11、６層から９、８層から10が出土している。このうち、11は備前焼の擂鉢である。よく使用されており、内面の櫛描き条線はかなり摩耗して浅くなっている。小片のため時期の詳細は分からないが、中世のものであろう。９は弥生土器の甕で、口縁下部に箆描きによる２条の沈線を巡らしていることから、弥生時代前期中葉のものと考えられる。10は弥生土器の壺で、ラッパ形に大きく開く口縁部に縦長の胴部をもつ形態のものである。口唇部を面取りし、その中央に箆状工具による１条の沈線と、さらにその上下に刻み目を密に施している。頸部には貼付突帯を４条巡らせており、突帯上にも刻み目を密に施している。調整は外面がヘラミガキ、内面がナデである。これらの特徴から、弥生時代前期末のものと考えられる。

Ｔ－15（第17図・図版２－６）

主軸を南北方向に設定し、西壁を実測した。遺構は確認されなかったため、土層のみ掲載している。土層のうち、１・２層は現代水田土である。３・４層は近現代の旧耕土、５～11層は砂礫層で、土石流によって一気に埋まった状況を呈している。12層は西の丘陵から続く基盤層で、北から南に向かって落ち込んでいる。ここに洪水砂が堆積した状況が観察できることから、Ｔ－15は西から東に延びる谷地形の南の肩口にあたるものと考えられる。遺物は３層から12・13が出土している。12は備前焼の擂鉢、13は土師質の小皿で、両者とも室町時代のものと考えられる。



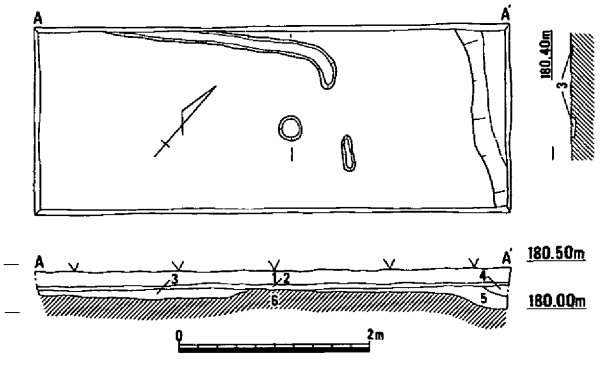
1．暗灰褐色粘質土
2．暗赤褐色粘質土
3．暗灰褐色粘質土
4．暗褐色粘質土
5．黒灰色砂
6．黒灰色砂質土
7．黒灰色粘質微砂土
8．黒灰色粗砂
9．黒色粘質粗砂
10．黒色粘質微砂土
11．黒灰色砂
12．青灰色粘質土



第17図　Ｔ－15断面図（１/80）・出土遺物（１/４）

Ｔ－16（第18図）

主軸を東西方向に設定し、北壁を実測した。土層のうち、１・２層は現代水田土、４・５層は近現代の造成土、６層は西の丘陵から続く基盤層である。遺構は６層上面で溝と柱穴を検出した。溝・柱穴とも深さ５～10cmほど残存するのみで、この一帯が大きく削平を受けていることを窺わせる。遺物が出土していないため、時期や性格もよく分からないが、埋土の状況から近現代の耕作に伴うものと思われる。また、トレンチ東端の落ち込みも近現代の耕作によるものである。

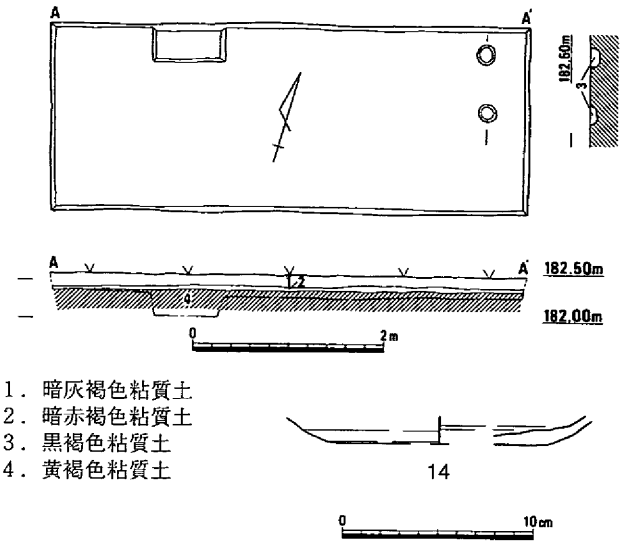


1．暗灰褐色粘質土
2．暗赤褐色粘質土
3．淡褐灰色粘質土
4．暗赤褐色粘質微砂土
5．灰褐色粘質微砂土
6．灰褐色粘質土

第18図　Ｔ－16平・断面図（１/80）

Ｔ－17（第19図・図版２－７）

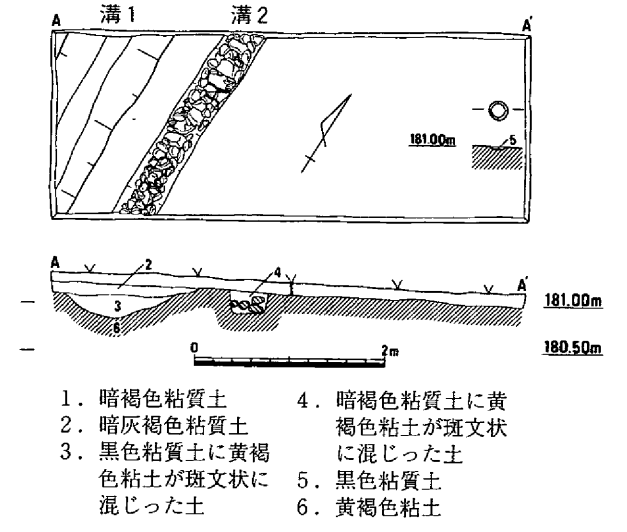
主軸を東西方向に設定し、北壁を実測した。土層のうち、１・２層は現代水田土、４層は西の丘陵から続く基盤層である。遺構は４層上面で柱穴２基を検出した。柱穴は検出面から深さ10cmほど残存するのみで、この一帯が全体的に大きく削平を受けていることを窺わせる。２つの柱穴は南北に60cm程の間隔をおいて並んでいるが、調査範囲が限られているため、有機的な関係をもつものなのかどうか確証は得られなかった。また、遺物が出土していないため、時期もはっきりしないが、１層から14の須恵器が出土していることや、埋土から古代以前の遺構と考えられる。14は須恵器の杯身で底面はヘラケズリである。時期の確定は難しいが、７世紀代のものと考えられる。



第19図　Ｔ－17平・断面図（１/80）・出土遺物（１/４）

Ｔ－18（第20図・図版２－８）

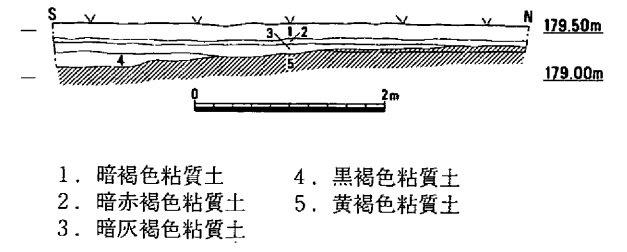
主軸を東西方向に設定し、北壁を実測した。土層のうち、１層は現代水田土である。６層は西の丘陵から続く基盤層である。遺構は６層上面で溝２条、柱穴１基を検出した。このうち柱穴は深さ５cmほど残存するのみで、この一帯が大きく削平を受けていることを示唆している。溝１・２は約１ｍの間隔で、南北方向に平行して掘削されていることから、有機的な関係をもつものと考えられる。溝１は素掘りの溝で、検出面で幅１ｍ・深さ20cmを測り、断面形はなだらかなＵ字形を呈する。溝２は石組の暗渠溝で、検出面で幅40cm・深さ20cmを測り、断面四角形を呈する掘り方に、拳大の円礫・角礫を充填したものである。遺物が出土していないため、遺構の時期ははっきりしないが、埋土の状況から柱穴は中世以前の遺構と考えられ、溝１・２は近現代の用水路と思われる。



第20図　Ｔ－18平・断面図（１/80）

Ｔ－19（第21図）

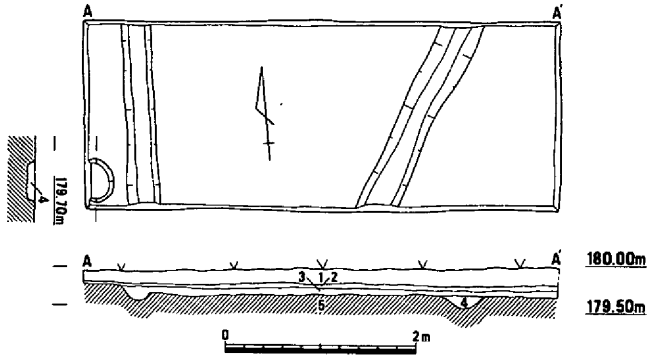
主軸を南北方向に設定し、西壁を実測した。遺構は確認されなかったため、土層のみ掲載している。土層のうち、１・２層は現代水田土、３・４層は近現代の旧耕土、５層は西の丘陵から続く基盤層である。全体にかなり削平を受けており、遺構は消滅しているものと思われる。また、遺物も出土していない。



第21図　Ｔ－19断面図（１/80）

Ｔ－20（第22図）

主軸を東西方向に設定し、北壁を実測した。土層のうち、１・２層は現代水田土、３層は近現代の旧耕土、５層は西の丘陵から続く基盤層である。遺構は５層上面で溝２条、柱穴１基を検出したが、埋土の状況からいずれも近現代の耕作に伴うものと考えられる。遺物は出土していない。

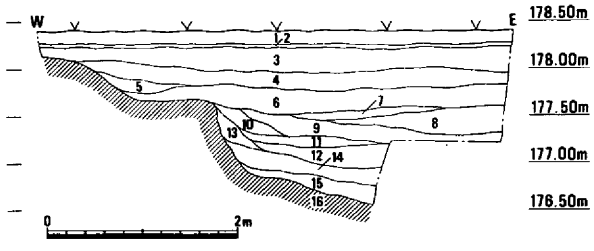


１．暗褐色粘質土　　４．暗褐色粘質土
２．暗赤褐色粘質土　　５．灰褐色粘質土
３．暗灰褐色粘質土

第22図　Ｔ－20平・断面図（１/80）

Ｔ－21（第23図）

主軸を東西方向に設定し、北壁を実測した。遺構は確認されなかったため、土層のみ掲載している。土層のうち、１・２層は現代水田土、３～６層は近現代の旧耕土、７～15層は洪水砂である。16層は西の丘陵から続く基盤層で、トレンチ中央付近から東へ大きく落ち込んでいる。これはすぐ東を流れる中津井川による削剥のためと考えられ、ここに７～15層の洪水砂が堆積した状況が観察できる。遺物は３層から須恵器の小片が１点出土している。



１．暗褐色粘質土　　９．暗褐色粗砂
２．暗赤褐色粘質土　　10．暗褐灰色細砂
３．灰褐色砂質土　　11．褐灰色粗砂
４．暗灰褐色砂質土　　12．暗褐灰色粗砂
５．暗灰色細砂　　13．褐色粗砂
６．暗褐色砂質土　　14．暗灰色粗砂
７．淡灰褐色細砂　　15．暗褐色粗砂
８．淡灰褐色粗砂　　16．灰褐色粘質土

第23図　Ｔ－21断面図（１/80）

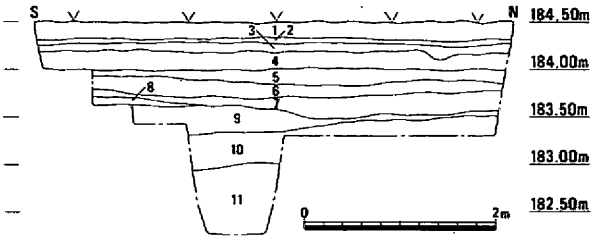
以上、Ｂブロックの調査結果についてまとめる。Ｔ－13～15を結ぶライン上には西から谷地形が延びており、弥生時代頃に洪水により埋没したことが明らかになった。また、Ｔ－17・18では弥生時代～古代の遺構・遺物を確認し、西の丘陵裾部で周知されていた名乞遺跡の範囲がＴ－17・18一帯まで広がることが判明した。しかし、Ｔ－17・18からやや下がったＴ－15・16・19・20一帯では後世の削平が激しく、遺構はすでに消滅している可能性が高い。また、Ｔ－21では中津井川の古い河道肩口を確認した。

Ｃブロック（Ｔ－22～28）

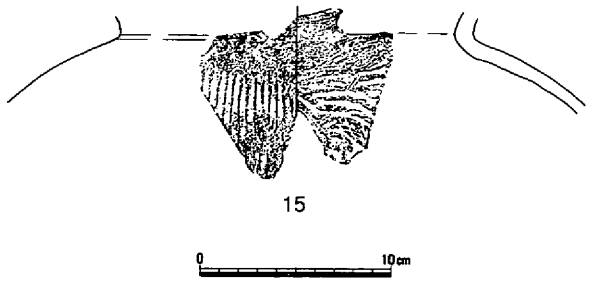
ＣブロックはＢブロック同様、中津井川左岸の丘陵裾部に位置する。この一帯には周知の埋蔵文化財包蔵地はなかったが、なだらかな丘陵が樹枝状に展開しており、地形的に埋蔵文化財が存在する可能性が高いと考えられた。このため、丘陵裾部を中心に７本のトレンチを設定し調査を行った。

Ｔ－22（第24図）

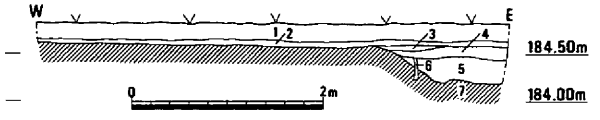
主軸を南北方向に設定し、西壁を実測した。遺構は確認されなかったため、土層のみ掲載している。土層のうち、１・２層は現代水田土、３・４層は中近世の旧耕土である。６層以下は堆積土で、表土下２m20cmまで掘り下げたが、基盤層は確認できなかった。遺物は４層から15の須恵器の甕が出土している。こうした状況から、Ｔ－22周辺は西から延びる谷の延長上にあたり、洪水により古墳時代後半には埋没し、中近世以降耕地化されたものと考えられる。



1．暗褐色粘質土
2．褐色粘質土
3．暗灰褐色砂質土
4．暗褐色砂質土
5．暗褐色砂質土
6．暗褐色粘質微砂土
7．暗灰色粘質土
8．褐色粗砂
9．暗褐色粗砂
10．暗灰褐色細砂
11．暗灰色粗砂

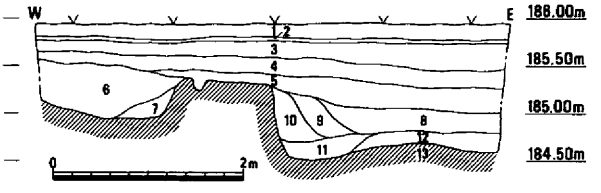


第24図　Ｔ－22断面図（１/80）・出土遺物（１/４）



1．暗褐色粘質土
2．暗赤褐色粘質土
3．暗灰褐色粘質土
4．３層と７層が斑文状に混じった土
5．暗褐灰色粘質土
6．暗灰褐色粘土
7．黄褐色粘質土

第25図　Ｔ－23断面図（１/80）



1．暗褐色粘質土
2．暗赤褐色粘質土
3．暗褐色粘質微砂土
4．暗褐色粘質土
5．黒褐色粘質土
6．黒色粘質土
7．灰黒色粘質土
8．灰黒色粘質土
9．灰黒褐色粘質土
10．淡灰黒色粘質土
11．黒色粘土
12．黒灰褐色粘土
13．灰褐色粘土

第26図　Ｔ－24断面図（１/80）

Ｔ－23（第25図・図版３－２）

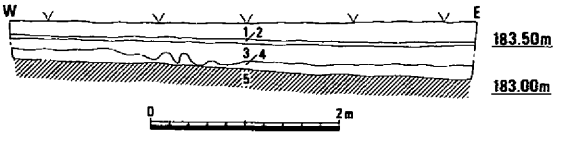
主軸を東西方向に設定し、北壁を実測した。遺構は確認されなかったため、土層のみ掲載している。土層のうち、１・２層は現代水田土、３～５層は近現代の造成土、６層は杭の痕跡、７層は西の丘陵から続く基盤層である。全体的に近現代の耕作による削平を大きく受けており、トレンチ東端では段状に掘削されている。遺物も出土していない。

Ｔ－24（第26図・図版３－３）

主軸を東西方向に設定し、北壁を実測した。遺構は確認されなかったため、土層のみ掲載している。土層のうち、１・２層は現代水田土、３～５層は近現代の造成土、６・７層、８～12層は旧耕土、13層は基盤層である。13層は段状に掘削され、トレンチ中央付近が土手状に削り残されている。これを境に上段に６・７層、下段に８～12層が堆積し、その上に５層以上が堆積している。こうした状況から、この一帯は近現代に造成される前はより小規模な水田が営まれていたと考えられる。遺物は出土していない。

Ｔ－25（第27図）

主軸を東西方向に設定し、北壁を実測した。遺構は確認されなかったため、土層のみ掲載している。土層のうち、１・２層は現代水田土、３層は近現代の旧耕土、４層は旧表土、５層は基盤層である。Ｔ－25周辺は中津井川の低位河岸段丘にあたり、地形的に河川の影響を受けやすいことから、埋蔵文化財は存在しないものと考えられる。遺物も出土していない。



1．暗褐色粘質土
2．暗赤褐色粘質土
3．黒褐色粘質土
4．黒色粘質土
5．褐灰色粘質土

第27図　Ｔ－25断面図（１/80）

Ｔ－26（第28図・図版３－４）

主軸を東西方向に設定し、北壁を実測した。土層のうち、１層は現代水田土、２・３層は近現代の造成土、４層は近現代の旧耕土と考えられる。７層は基盤層で、この上面で土壙１基、柱穴１基を検出した。土壙１はトレンチの北西で検出したが、底面が一部残存するのみで本来の規模は分からない。柱穴も深さ20cm程残存するのみで、Ｔ－26周辺が全体的に後世の削平を受けていることを窺わせる。両者とも遺物が出土していないため時期は不明であるが、埋土の状況から中世以前の遺構と考えられる。遺物は４層から弥生土器の細片が出土している。

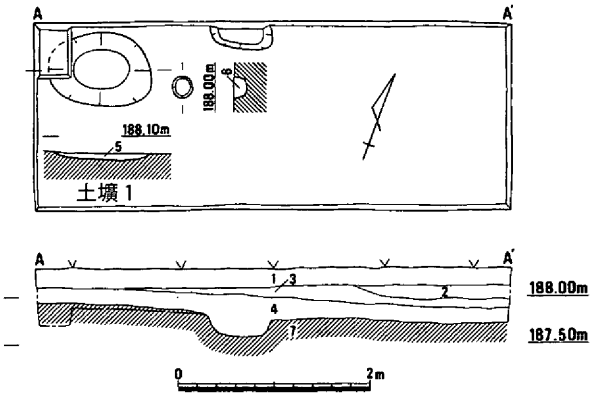
Ｔ－27（第29図・図版３－５）

主軸を東西方向に設定し、北壁を実測した。土層のうち、１・２層は現代水田土、３・４層は近現代の耕土あるいは造成土である。５層は旧表土と考えられ、弥生～古墳時代の遺物包含層である。６層は基盤層で、この上面で径５～10cm、深さ５cmほどの小穴を多数検出した。小穴は平面・断面形とも不定形で、埋土は５層とよく似ている。こうした状況からこれらの小穴は人為的な遺構ではなく、樹根の痕跡と考えられる。遺物は５層から須恵器・弥生土器の細片が数点出土している。

Ｔ－28（第30図・図版３－６）

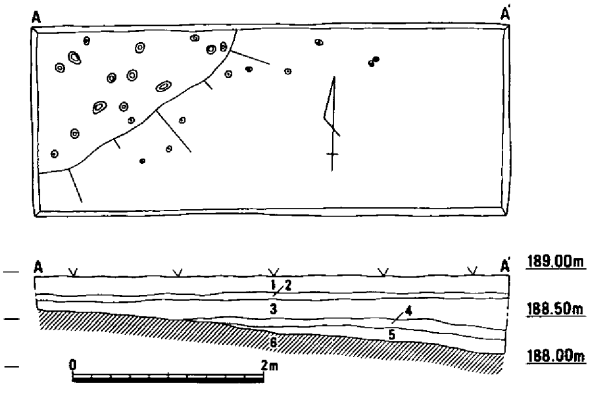
主軸を東西方向に設定し、北壁を実測した。土層のうち、１・２層は現代水田土、３・４層は近現代の造成土である。５層は基盤層で、この上面で土壙１基を検出した。土壙２は深さ約20cmを測り、埋土から弥生土器片が出土していることから当該期の遺構と考えられる。遺物は３層から弥生土器の細片のほか、サヌカイトの剥片が１点出土している。

以上、Ｃブロックのうち Ｔ－26～28で弥生～古墳時代の遺構・遺物を確認し、この一帯を中心に当該期の集落跡があることが明らかになった。この地点を平田遺跡Ｃ地点とする。



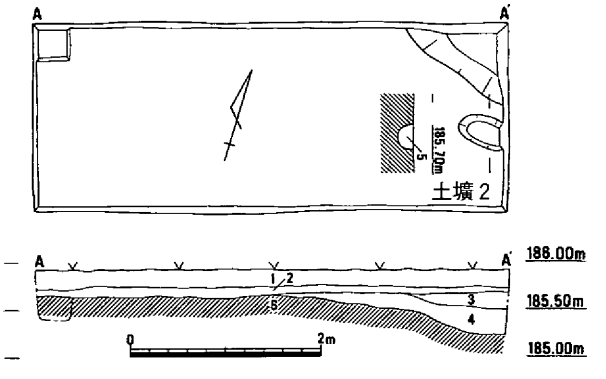
１．暗褐色粘質土
２．暗灰褐色粘質土に黄褐色粘質土が斑文状に混じった土
３．暗灰褐色粘質土
４．黒褐色粘質土
５．淡灰褐色粘土
６．黒色粘質土
７．黄褐色粘質土

第28図　Ｔ－26平・断面図（１/80）



１．暗褐色粘質土
２．暗赤褐色粘質土
３．暗灰褐色粘質土
４．暗褐色粘質土
５．黒褐色粘質土
６．灰褐砂質土

第29図　Ｔ－27平・断面図（１/80）



１．暗褐色粘質土
２．暗赤褐色粘質土
３．暗灰褐色粘質土に黄褐色粘質土が斑文状に混じった土
４．暗灰褐色粘質土
５．黒色粘質土
６．褐色砂質土

第30図　Ｔ－28平・断面図（１/80）

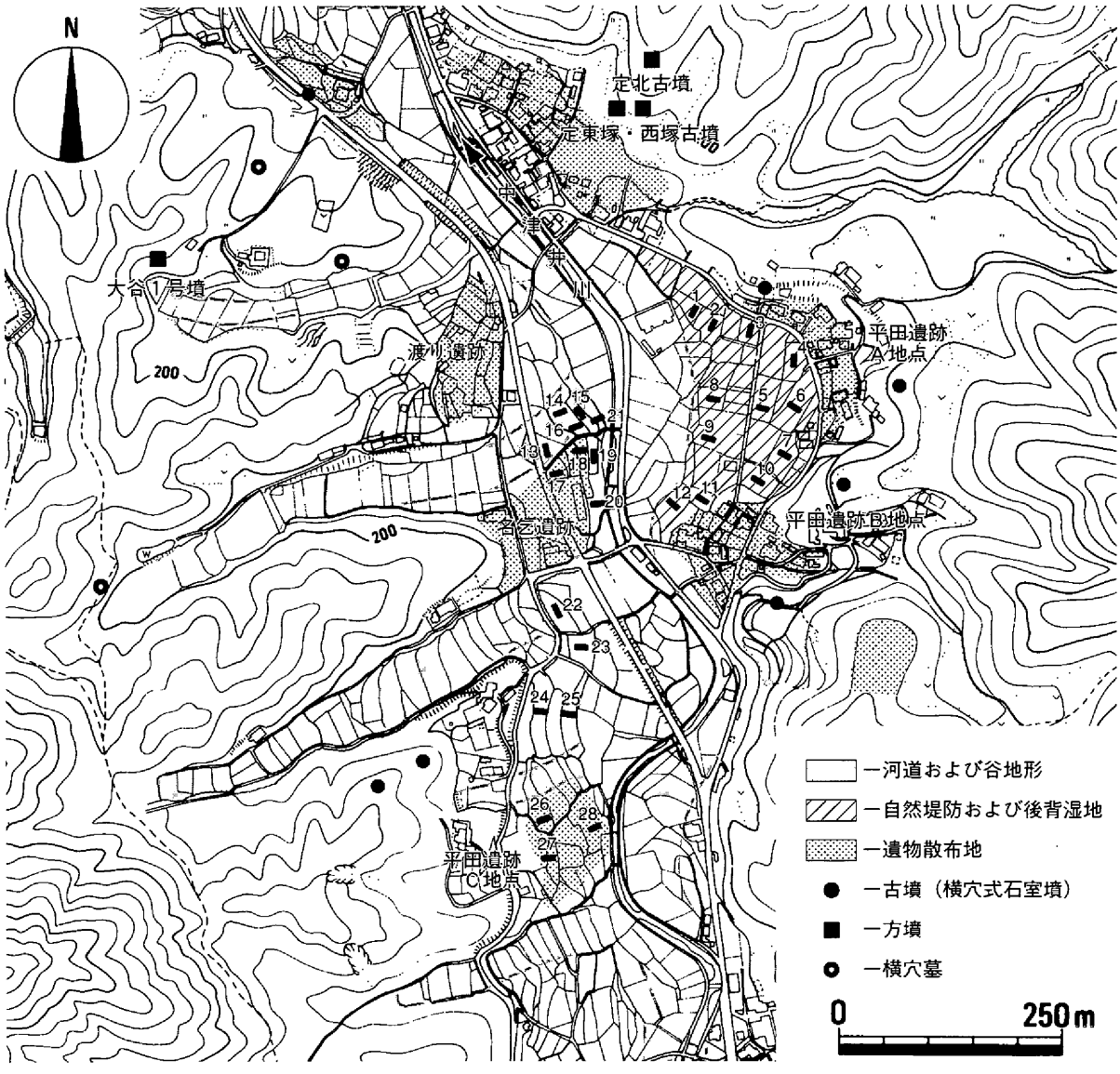
第4章 ま と め

県営北房町圃場整備事業に伴い、圃場整備予定地内で埋蔵文化財（以下、遺跡とする）の所在が予想される地点について２×５ｍのトレンチを計28か所に設定し、確認調査を実施した。調査の結果、圃場整備予定地内における遺跡の広がりや遺存状況が判明したほか、旧地形や周辺遺跡の状況をある程度把握することができた。以下、今回の調査成果についてまとめる（第31・32図参照）。

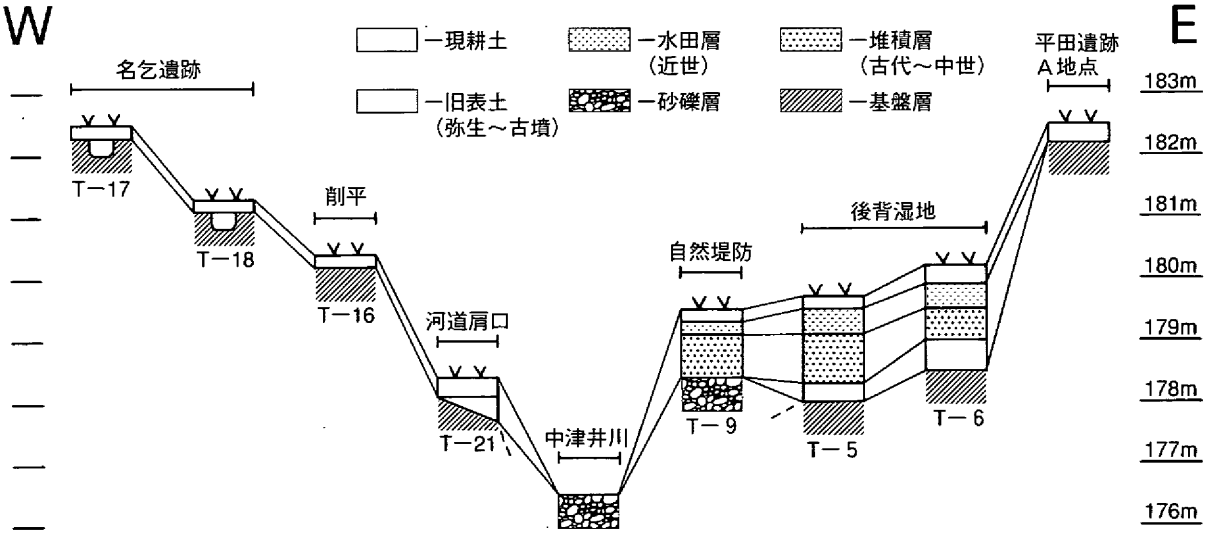
調査地点は大きく３地点に分かれる。まず、ＡブロックとしてＴ－１～12を中津井川右岸の水田地帯に設定した。このうち、丘陵沿いに設定したＴ－１～７では遺構は認められず、その基本層位は上から現代水田土・近世水田土・古代～中世の堆積土・弥生～古墳時代の旧表土・基盤層という状況であった。近世水田土以下の層は水分を多く含む粘性の強い土壌で、中世以前の水田層の可能性も考慮して精査したが、畦畔などは認められず、土質や堆積状況、遺物の出土状況から、水田層の可能性は低いものと思われる。こうした状況から、近世に水田として開発されるまで、この一帯は中津井川の後背湿地であったと考えられる。また、中津井川に近いＴ－８・９では弥生～古墳時代旧表土の下層に砂礫層が堆積していることから、中津井川の旧流路に沿って自然堤防が形成されているものと考えられる。これらのトレンチから出土した遺物はいずれも小片で、すぐ東の丘陵裾部に位置する平田遺跡Ａ地点から流れ込んだものと考えられる。この一帯の水田に鴨田・鴨代など、鴨の付く小字が多いことからも、かつてはかなり湿潤な状況であったと思われる。なお、17世紀後半に備中松山藩が今回の調査対象地にあたる旧中津井村で４町歩（約４万㎡）の新田開発を行った記録が残されている[1]。確認調査の成果から、Ａブロック一帯で確認した近世の水田層は、この時の新田開発により形成されたものである可能性が非常に高いと考えられる。また、Ｔ－10～12の東方一帯には小規模な扇状地が形成されており、ここには平田遺跡Ｂ地点（古墳時代～中世の遺物散布地）が所在する。この小扇状地の外縁に沿って設定したＴ－10～12は遺構・遺物とも非常に希薄で、平田遺跡Ｂ地点の縁辺部にあたるものと考えられる。

次に、ＢブロックとしてＴ－13～21を中津井川左岸の丘陵裾部に設定した。調査の結果、Ｔ－13～15では西から延びる谷地形を確認し、弥生時代頃に洪水によって埋没したことが明らかになった。また、Ｔ－17・18では弥生時代～古代の遺構・遺物を確認し、西の丘陵裾部で周知されていた名乞遺跡の範囲がＴ－17・18一帯まで広がることが判明した。しかし、Ｔ－17・18からやや下がったＴ－15・16・19・20一帯では後世の削平が激しく、遺構はすでに消滅している可能性が高い。また、Ｔ－21では中津井川の古い河道肩口を確認した。なお、平安時代後期の治暦四年（1068年）、後三條天皇の大嘗祭に備中国中井郷から供御料が奉納されている。Ｔ－14～16を設定した田圃に於才田（おさいだ）という小字が付いていることから、この於才田が小斎田の転訛したものであるとして、この一帯を主基田に比定する説が出されている[2]が、今回の調査からはそれを証明する資料を得ることはできなかった。

最後に、ＣブロックとしてＴ－22～28を中津井川左岸の丘陵裾部に設定した。Ｔ－22は西から延びる谷の延長上にあたり、砂礫を主体とする谷の埋積状況を確認した。Ｔ－23・24は後世の地形改変が著しく、遺構・遺物とも確認できなかった。Ｔ－25は中津井川の低位河岸段丘にあたり、遺構・遺物とも認められなかった。なだらかな丘陵上に位置するＴ－26～28では弥生～古墳時代の遺構・遺物を



第31図　調査地周辺の遺跡分布図（1/8,000）



第32図　調査地周辺の土層柱状図

確認し、この一帯に当該期の集落遺跡が存在することが判明した（平田遺跡Ｃ地点）。

以上、確認調査の結果、圃場整備予定地内では２遺跡の所在が確認された。まず、周知の名乞遺跡の範囲がＴ－17・18一帯まで広がることが判明した。また、Ｔ－26～28一帯に平田遺跡Ｃ地点が所在することが確認された。さらに、現在見られる田園風景は中世以降の開拓と近世の新田開発により形作られたものであり、古代以前の情景はかなり異なっていたことが判明した。中津井川は現在よりかなり幅広い範囲を氾濫原として北流しており、左岸側からは丘陵谷間から幾筋もの谷川が注ぎ込み、右岸側は葦が繁茂する湿地帯になっていた状況が想定できる。また、集落は平地部には広がらず、基本的に低丘陵の頂部と丘陵裾部を中心に、散在的に展開していることが明らかになった。ただし、今回確認調査を実施したのは圃場整備予定面積41haのうち、事前の分布調査で遺物が採取された範囲及び地形的に遺跡の存在が想定できる範囲に限られており、作付や上物の関係で調査できなかった部分もあることから、確認された遺跡の範囲はあくまで推定であることを付け加えておく。

最後に、今回圃場整備予定地内で確認された遺跡の今後の取扱いについて記しておく。平成13年１月、関係機関出席のもと協議が行われた結果、名乞遺跡と平田遺跡Ｃ地点については、遺跡の保存に支障がないよう、盛土による工事計画を策定した上で、圃場整備事業を実施することとなった。今後、圃場整備によって現在の地形は一変してしまうであろうが、関係各位の御理解と御協力により遺跡を保存することができたことは、埋蔵文化財保護行政を推進する上で大きな成果であった。

註

（１）柴田　一「幕藩領主の政治」『北房町史』通史編上　北房町教育委員会　1992年
（２）毛利　博「大嘗祭と主基田」『北房町史』通史編上　北房町教育委員会　1992年

第１表　確認調査成果一覧表

調査区	小字	包含層		遺構			遺物		備考
		上面の海抜高（m）	表土からの深さ（cm）	種類	検出面海抜高（m）	表土からの深さ（cm）	種別	量	
Ｔ－１	岸ノ下	－	－	－	－	－	弥生土器・土師器・須恵器	△	後背湿地
Ｔ－２	岸ノ下	－	－	－	－	－	弥生土器	△	後背湿地
Ｔ－３	横部下鴨代	－	－	－	－	－	弥生土器・土師器・須恵器	△	後背湿地
Ｔ－４	鴨田	－	－	－	－	－	弥生土器	△	後背湿地
Ｔ－５	鴨田井	－	－	－	－	－	－	×	後背湿地
Ｔ－６	鴨田	－	－	－	－	－	弥生土器・土師器・須恵器	△	後背湿地
Ｔ－７	鴨代	－	－	－	－	－	－	×	後背湿地
Ｔ－８	鴨代	－	－	－	－	－	－	×	自然堤防
Ｔ－９	鴨代	－	－	－	－	－	－	×	自然堤防
Ｔ－10	中屋	－	－	柱穴	179.20	85	土師器・須恵器	△	集落縁辺部
Ｔ－11	鴨田井	－	－	溝	179.00	65	－	×	集落縁辺部
Ｔ－12	井手尻	－	－	－	－	－	土師質土器・亀山焼	△	集落縁辺部
Ｔ－13	押目	－	－	－	－	－	須恵器	△	谷部
Ｔ－14	於才田	－	－	－	－	－	弥生土器・備前焼	△	谷部
Ｔ－15	於才田	－	－	－	－	－	弥生土器・土師質土器・備前焼	△	谷部肩口
Ｔ－16	於才田	－	－	溝・柱穴	180.20	20	－	×	遺構は削平か？
Ｔ－17	各原	－	－	柱穴	182.30	15	須恵器	△	名乞遺跡
Ｔ－18	各原	－	－	溝・柱穴	181.10	10	－	×	名乞遺跡
Ｔ－19	各原	－	－	－	－	－	－	×	遺構は削平か？
Ｔ－20	各原	－	－	溝・柱穴	179.70	20	－	×	遺構は削平か？
Ｔ－21	コフニゴ	－	－	－	－	－	須恵器	△	河道肩口
Ｔ－22	ソ子田	－	－	－	－	－	土師器・須恵器	△	谷部
Ｔ－23	黒土	－	－	－	－	－	－	×	遺構は削平か？
Ｔ－24	カムロ	－	－	－	－	－	－	×	遺構は削平か？
Ｔ－25	高田	－	－	－	－	－	－	×	低位河岸段丘
Ｔ－26	カムロ	－	－	土壙・柱穴	187.80	30	弥生土器	△	平田遺跡Ｃ地点
Ｔ－27	カムロ	188.40	60	－	－	－	弥生土器・須恵器	△	平田遺跡Ｃ地点
Ｔ－28	カムロ	－	－	土壙・柱穴	185.60	30	弥生土器・サヌカイト剥片	△	平田遺跡Ｃ地点

※遺物量のうち、△はナイロン袋１/３程度、×はなしを示す

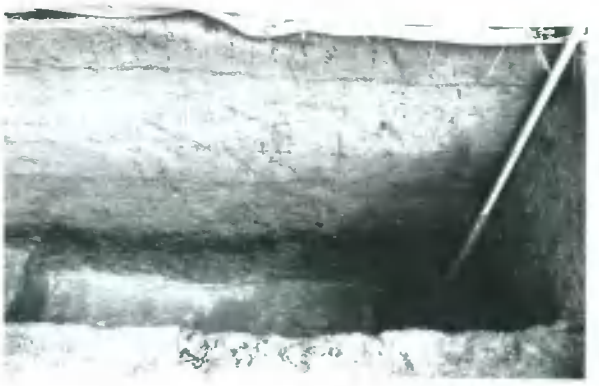
1．調査地遠景①
　Ｔ－１～12周辺
　（北から）

2．調査地遠景②
　Ｔ－22～28周辺
　（東から）

3．発掘作業風景
　Ｔ－１・２周辺
　（東から）

図版 2

1．T－4（南から）



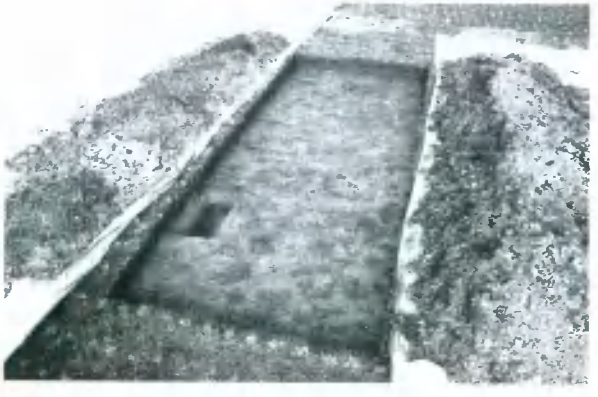
2．T－6（南から）

3．T－8（東から）

4．T－10（西から）

5．T－11（西から）

6．T－15（南から）



7．T－17（西から）

8．T－18（東から）

1．Ｔ－16（南西から）

2．Ｔ－23全景（南東から）

3．Ｔ－24（南東から）

4．Ｔ－26（東から）

5．Ｔ－27（東から）

6．Ｔ－28（南西から）

7．トレンチ埋め戻し作業（Ｔ－３）

8．埋め戻し終了後の状況（Ｔ－19）

図版 4

1

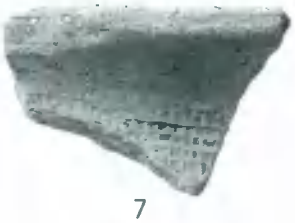
2

3

4

5

6

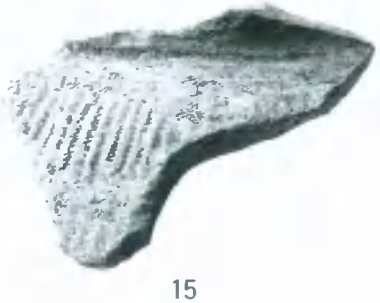

7

8

9

10

11


15

出土遺物（1／2）

報告書抄録

ふりがな	ひらたいせき
書名	平田遺跡
副書名	県営北房町圃場整備事業に伴う確認調査
巻次	
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ番号	159
編著者名	佐藤寛介
編集機関	岡山県古代吉備文化財センター
所在地	〒701－0136　岡山県岡山市西花尻1325-3　TEL　086－293－3211
発行機関	岡山県教育委員会
所在地	〒700－8570　岡山県岡山市内山下２－４－６　TEL　086－224－2111
発行年月日	2001年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ひらたいせき 平田遺跡	おかやまけん 岡山県 じょうぼうぐん 上房郡 ほくぼうちょう 北房町 かみなかつい 上中津井	33522	－	34° 60′	133° 38′	2000. 9 . 25～ 11. 14	280m²	県営圃場 整備事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
平田遺跡	集落	弥生時代～中世	溝・土壙・柱穴	弥生土器・土師器・須恵器・土師質土器・備前焼・亀山焼	

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告　159

平　田　遺　跡

県営北房町圃場整備
事業に伴う確認調査

平成13年３月23日　印刷
平成13年３月31日　発行

編　集　岡山県古代吉備文化財センター
岡山市西花尻1325－3
発　行　岡山県教育委員会
岡山市内山下２－４－６
印　刷　旭総合印刷株式会社
岡山市内山下２－10－３